

## 第2章 症状・病名別 漢方治療

### 1. 全身症状

#### 発熱

##### 発熱の常用処方

###### 1. 発熱悪寒

- |              |                |
|--------------|----------------|
| 1) 風寒襲表（表寒証） | 桂枝湯、麻黄湯        |
| 2) 風熱犯肺（表熱証） | 麻杏甘石湯、葛根湯合桔梗石膏 |
| 3) 風湿客表（湿熱証） | 防己黄耆湯、越婢加朮湯    |

###### 2. 往来寒熱

- |              |                 |
|--------------|-----------------|
| 1) 邪入少陽（少陽病） | 小柴胡湯            |
| 2) 外感瘧邪      | 桂枝二越婢一湯、桂枝二麻黄一湯 |
| 3) 湿邪鬱阻三焦    | 竹筴温胆湯合黄連解毒湯     |

###### 3. 潮熱

- |              |              |
|--------------|--------------|
| 1) 陽明腑実（陽明病） | 大承気湯、調胃承気湯   |
| 2) 脾胃気虚      | 補中益気湯        |
| 3) 暑熱傷気      | 清暑益気湯        |
| 4) 陰虚火旺      | 六味丸、三物黄芩湯    |
| 5) 瘀血内結      | 大黃牡丹皮湯、桂枝茯苓丸 |

#### 疾患の概念

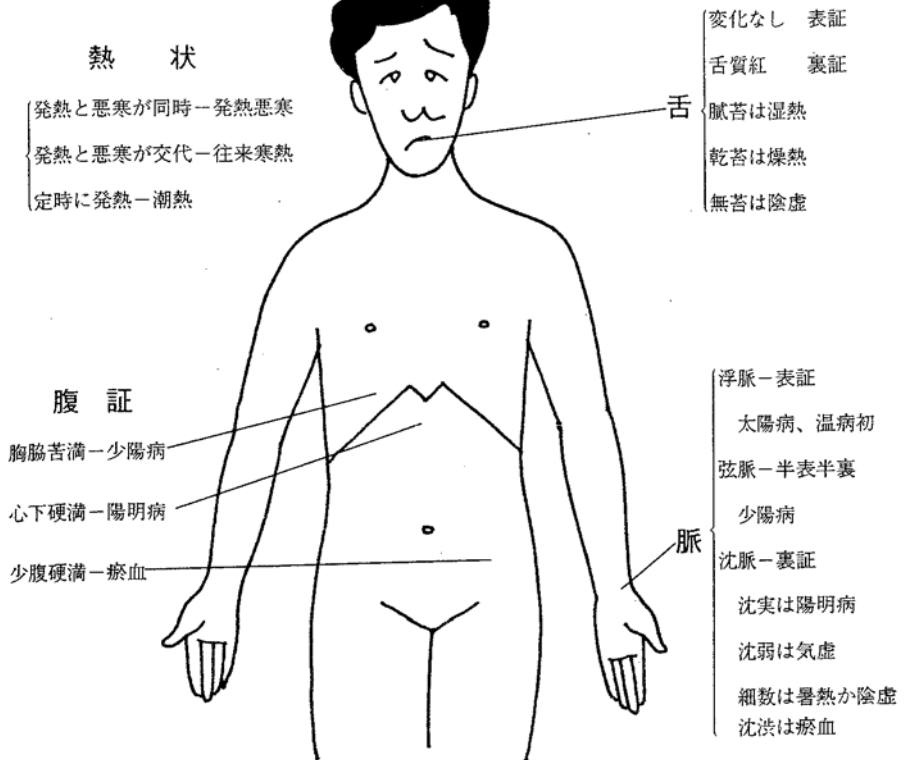
急性の発熱は多くは外感病に見られるが、慢性の発熱は外感病だけでなく気血津液の不調や五臓六腑の失調に因って生じるものもある。六淫の邪は何であれ、人体を侵襲する時は邪正斗争が生じる結果、すべて熱を発する。漢方で謂う熱は体温計に表われる数字には関係なく、自覚される熱である。

発熱悪寒とは、悪寒と発熱が同時にみられることを指し、外感表証の主症状であり、傷寒の太陽病、温病の衛分証、上焦証などで現れる。

往来寒熱とは、悪寒と発熱・熱感が交代して生じる熱型である。悪寒がある時は熱感は消失し、悪寒が去ると熱感が生じたり体温が上昇し、発熱がある時は悪寒は自覚しない。代表的なものは傷寒の少陽病である。

潮熱とは潮が満ちるように、一日の一定の時間になると発熱があるものである。往来寒熱の寒と熱の交代の時刻は不定で、その周期も不規則であるが、潮熱の発熱は規則正しく現れるのが最大の特徴である。

発熱弁証の要点



処方の運用

1. 発熱悪寒

悪寒発熱は表証を呈し、治法は解表散邪であるが、風寒、風熱、風湿を弁別する必要がある。

1) 風寒襲表

風寒の邪に因って発病する太陽病である。発熱悪寒と共に、頭痛、身疼、鼻汁、咳などの表寒証を伴う。

桂枝湯（桂枝4.0、芍薬4.0、大棗4.0、甘草2.0、JP生姜1.0）

風邪に因って生じる、太陽中風（表寒虚証）を主治する。微熱、悪風があり、膚が少し汗ばんでいる。脈は浮緩、表証では通常舌に変化は出ない。